

金沢大学附属病院

谷内 譜顕

2025 年 10 月 14 日

## 2025 年度ニューヨーク研修報告書

2 年次研修医の谷内 譜顕と申します。2025 年 8 月 15 日から 8 月 31 日の間、ニューヨーク研修に参加しました。私は医学 6 年生時に参加を希望していましたが、当院の研修医でないと補助を受けることが出来ないことから参加を断念しました。それから 2 年越しに今回の研修に参加することができ、大変嬉しく思います。約 2 週間、英語での医療面接や ACLS トレーニングなど数々の貴重な体験の機会を頂きましたが、特に印象的だった JMSA Shadowing についてご報告します。

プログラムの後半に、JMSA（米国日本人医師会）に所属し、現地で活躍されている日本人医師の方々のクリニックを 2 箇所、見学させて頂く機会がありました。

1 箇所目は東京海上記念診療所(Mount Sinai Doctors-Japanese Medical Practice)です。NY 北部の Hartsdale という、マンハッタンから特急列車で 1 時間程の田舎町にあります。一般内科に加え小児科・老年医学をカバーしており、小児～成人患者を院長の Maki Kano 先生、成人～高齢患者を Hirokazu Ban 先生が担当されていました。患者層は主に日本人駐在員・家族・旅行者が多いのですが、現地在住のアメリカ人患者さんもクリニックの先生方を頼りに利用されている様子でした。午前中は Kano 先生の外来を見学させて頂きまし

た。 クリニックには診察室が4室ほどあり、各個室の診察台に患者さんを待機させ、医師の方から診察室に向かう形式でした。 患者さんに診察室へ入ってもらう日本とは逆なのが興味深く、通路ともドアで締め切られているためプライバシーへの配慮が感じられました。

アメリカの年度初めは9月ということで、小児では学校入学前の健康診断を目的に来られる方が多い印象でした。 Kano 先生が日本語・英語をうまく状況に応じて使い分けながら、小児患者さん、保護者の方々とフランクにコミュニケーションを交わされていました。 午後からの Ban 先生の外来では、重度のうつ病患者さんの問診を見学させて頂きました。 患者さんは、ご家族が皆海外在住で近くに身寄りがなく、精神的に参っている様子でした。 患者さんの涙ながらの告白を、Ban 先生は真剣に傾聴し、温かい言葉を掛けられていたことをよく覚えています。 医師の患者に対する Empathy（共感的態度）が重要視されるのはアメリカでも一緒です。 簡単なフレーズでは“I’m sorry to hear that.”（それを聞いてお気の毒に思います。 ） ”That sounds hard.”（大変でしたね。 ） があり、少し長めのものでは“I can see that this has been very difficult for you.”（とても大変だったこと、お察しします。 ） “I understand why you would feel that way.”（そのように感じられるのは当然だと思います。 ） などがあります。 中々日常的には使わない表現なので、いざ外国人の患者さんを前にした時にフォーマルな表現を使えるようにするにはある程度練習が必要だと思いました。

2 箇所目は NY Midtown Obstetrics & Gynecology に伺いました。 マンハッタンの Midtown East に位置し、国際連合本部ビルの近くにあります。 宿泊したホテルとも近いため徒歩で 10 分程度の距離でした。 産婦人科医師の Mio Sawai 先生の外来を 1 日中見学し、

妊婦の定期検診や婦人科疾患の患者さんの問診・診察をメインに拝見しました。こちらでは、日本からはるばる来られた夫婦の症例が衝撃的でした。奥さんが第一子出産時に産科DICとなり、止むなく子宮全摘で事無きを得たのですが、第二子を希望されており、代理母出産を利用したいとの相談でした。日本での代理母出産は、法的に禁止はされていないものの、日本産婦人科学会の方針により事実上不可能であり、代理母出産が商業的に認められている国はアメリカの一部の州、ギリシャ、ロシア、ジョージアなどがあります。戦争や犯罪のリスク、代理母の肥満率、医療水準を鑑みると、最も安全に行えるのがアメリカだそうです。しかし、費用に2000万円程度かかり経済的負担が大きいため、Sawai先生は養子縁組を提案されましたが、やはり自分たちと血が繋がった子供が欲しいとのことで却下されました。代理母出産は、過去には産まれた児が障害を持っていることを理由に夫婦が受け取りを拒否したケースや、代理母が児に愛着が湧き引き渡しを拒否したケース、代理母が出産途中で亡くなったケースもあり、問題となっていました。近年カリフォルニア州などでは法整備が進み、代理母の志願に厳しい条件を設けたり、親権保護制度を取り決めたりなど安全に利用する土壌が整ってきてはいますが、依然として子供一人を授かるための労力があまりに大きいと感じました。

今回診療所を2箇所見学して特に印象的だったのが「カルテ」です。アメリカではEpic社というメーカーのカルテが最大シェアで、以下のような多彩な機能があるそうです。

1. Epic Chat：LINEのような医師・看護師とのチャット機能。病棟からの電話対応や対診書が不要。

2. Care Everywhere：外部病院のカルテなどを閲覧する機能。診療情報提供書が不要。
3. Smart Phrase：Objective データのテンプレート機能。自由にカスタマイズ可能で、必要なバイタルや検査所見などが自動入力される。
4. Care gap report：ワクチン接種歴などの年齢相応の検査が行われているかを確認できる。
5. Haiku：スマホからアプリで電子カルテにアクセス出来る。
6. リモートアクセス：自分のパソコンから電子カルテにアクセス出来る。在宅でのカルテ記載やオーダーが可能。
7. 電子処方箋：ほとんどの州で電子処方箋が主流。紙の処方箋が不要。

などなど、業務が徹底的に効率化されており、衝撃を受けました。最近では AI 技術の発達により自動でカルテや書類を作成してくれる機能や、ディクテーション機能を用いて、問診中にカルテを書かずとも勝手に文章化してくれる機能など、日本のものと比較して 2 歩も 3 歩も先を行っているようでした。いつかこちらでも導入されることを願います。

今回、クリニックでの研修に当たり、お忙しい中貴重なお時間を頂き、ご指導下さった Maki Kano 先生、Hirokazu Ban 先生、Mio Sawai 先生を始め、スタッフの方々に深く御礼申し上げます。有難うございました。

